

井上靖小説全集
24

化石

井上靖

新潮社版

化 石

〈井上靖小説全集24〉



昭和48年7月20日発行

昭和51年10月30日3刷

定価 950円

© Yasushi Inoue, 1973,

Printed in Japan.

著 者 井 上 靖

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一電

話・業務部(〇三)二六六一

五一―、編集部(〇三)二六

六一五四―郵便番号・一

六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えます。

目次

化石

自作解題

五

六九

装
画
加
山
叉
造

井上靖小説全集 第24卷

化 石

一 章

その朝、一鬼^{いづ}太治平は五時に眼覚めた。廊下づたいに母屋へ行つたが、誰もまだ起き出してゐる氣配はなかった。三、四日前から誕生を過ぎたばかりの子供を連れて手伝いに来てゐる長女の朱子の寝てゐる二階の方も静かだし、お手伝いの若い女たちの部屋の方もしんとしている。

一鬼はタオルの寝衣のまま洗面所へはいって行くと、余り大きな音を立てないように注意して水道の栓をひねつた。この三、四日朱子が家に来てゐるお蔭で、鏡の前の化粧品の壺の並んでゐるガラス製の棚の上がきちんと整頓されてゐる。思い思いの形をし、思い思いの色の液体を詰めた壺が三十個ほどひしめき合つて並んでゐるが、一鬼の用のあるのはアフター・シェイブのローションと、頭髮へ振

りかけるペーラムと、ボマードだけである。あとは、今は嫁いでゐる二人の娘——朱子と清子のものばかりである。二人の娘たちはやめ暮しの父親を見舞つて、時折り泊りがけでやつて来るが、その時のために、洗面所の棚の上は相変らず賑やかで、花やかである。

一鬼は洗顔し、調理場から持つて来た魔法瓶の湯で頬をむして、ひげを剃ると、居間へ戻つて、この場合も静かに雨戸をくつた。朱子も女たちも、七時までは眠らせておいてやろうと思う。この三、四日、一鬼の外国旅行騒ぎの余波をくつて、家にも何かと用事があつて、家の者たちの夜更かしは続いてゐた。今朝はもう九時に自動車を迎えに来て、それに乗つて空港へ向うだけである。旅行の支度は全部朱子がやつてくれてある。

一鬼はふだん着のズボンとセーターで身を包みながら、玄関に出してある二個のスーツ・ケースの内容品を一応確かめてみようと思つた。支度は全部朱子に任せてあり、朱子は自分のやることに抜かりはないと思ひこんでゐるが、しかし、そのことを一鬼は必ずしも信用してゐるわけではなかつた。朱子を信用した風を装つて何もかも任せてはゐるが、それは家庭を持つて急に主婦らしくなつた娘を一応立ててやつてゐるだけのこと、他の者の能力を信用しないことは、家庭においても、会社においても、同じことで

あった。他人にやらせたことは、何事によらず、自分が点検したら、必ず気に入らぬ事の二つや三つは見付けだすだろうという一種の確信に似た気持を持っていた。ただ、このところ、年齢のせいとか、口うるさいと思われるのを避けて、なるべく先方を立てるように努めているだけのことである。

一鬼は自分でガスコンロの上に薬罐をかけて湯を沸すと、庭の隅に咲き盛っている菊の株に眼を当てながら茶を飲んだ。三カ月程日本のお茶とお別れである。帰国は年末ぎりぎりになる予定なので、そのころはもう菊の株もすっかり霜枯れているだろう。

玄関へ出て、その床の上に置いてあるスーツ・ケースの蓋を開けて、内容品を改めてみると、朱子が階段を降りて来た。二階の洗面所で顔を洗ったらしく、さっぱりと顔も作ってあり、子供を産んでから急に脂肪ののって来た皮膚の輝きが、父親の一鬼にも眩しかった。

「あら、お父さん、余りかきまわさないで頂戴。きちんと詰めてありますのよ」

朱子は言った。まだ二十二歳なのに、母親が亡くなってから、何となく父親に対してある権力を持つて来ている。

「玲子は寝ているね」

誕生を過ぎたばかりの孫のことを、一鬼が訊ねると、

「ゆうべは夜中に這い出して大変でした。お蔭でわたしが寝たの三時ごろだったでしょうか。——いまはぐっすり眠っています」

朱子は言った。

「今日、空港へ連れて行ったら悦ぶだろう」

「玲子をですか」

「とんでもないといった顔を朱子はした。」

「玲子はだめ。人混みの中に連れて行って病氣でもうつされては」

そう言われれば、自分の子でないから、それ以上連れて行けとは言えない。しかし、一鬼としては、家に残しておいて、手伝いの若い女たちに任せておくより、空港へ連れて行く方が安全だと言いたい。それに少しは人混みの中に連れて行くことも抵抗をつける上には必要なことであろう。

「九時でしたわね。会社からお迎えが来ますの」

「うん」

「送って下さる方、多勢でしょうね」

「そうでもあるまい」

「でも多勢だと思うわ。こんどの旅行は長いんですから」
一鬼のこんどのヨーロッパ旅行は三カ月の予定である。

これまでここ数年、年に一回や二回はアメリカかヨーロッパに出掛けているが、いつも用件を果せばすぐ帰る十日か

二十日の旅である。せっかく外国旅行をするのだから、せめて少しぐらいは見物に日をさいたらと人も勧めるし、自分もそう思わぬでもないが、一鬼の立場になると、なかなかそうのんびりしてはいられない。妻の居ない留守の家のことも気になったし、仕事のことも気になった。どんな些細なことでも人に任せておくことができない性分で、自分が会社の社長室の椅子に収まっていけない限り、社の仕事はびたりと停止してしまいそうな気がする。社長が一月や二月は不在でもいささかも社業には関係ないと、陰口のきかれていることも承知しているが、一鬼に言わせれば、なかなかそうしたものではない。いついかなる手違いが起って来るか判ったものではない。会社には一応大幹部と言われている連中が十人程居るが、一鬼が仕事に対する能力を認めているのは二人か三人である。その二人か三人も、一鬼から見ればまだまだ全部を任せられる人物ではない。他の者はそうは思っていないが、一鬼ひとりはその思いこんでいる。

女たちが起き出したらしいので、部屋の掃除ができるまで、一鬼は庭へ出ていることにした。居間からスリッパを履いたままで庭に降りた。二百坪程の芝生の庭が拡がっている。庭師がはいったばかりなので、芝生はきれいに刈り込まれ、掃除も行き届いている。庭の樹木は一鬼の好みで

常緑樹ばかりが植えられてあるので、紅葉する木は極く僅かである。庭の隅の大きな楓の木と車庫の横の柿の木だけが黄色の葉をつけている。その僅かの紅葉も、この間の台風が潮風を運んで来たいわゆる塩害で、色が例年ほど冴えていない。

「お電話です」

手伝いの娘が報らせて来た。

電話と聞いて、一鬼は気難しい顔をした。

「まだ眠っていると云ってくれ」

一鬼は言った。いくら外国へ発つ朝だとは言え、見境のない時間に電話をかけて来る奴があるものだと思った。

「戸塚からです」

「清子からか」

「はい」

戸塚のアパートに居る妹娘の清子からとなると、電話口へ出てやらねばならなかった。この春二十歳で嫁がせたばかりであり、母親があれば母親に訴えるような訴えも、みな一鬼のところへ持ちこんで来る。家も会社も区別なしに毎日のように電話をかけて来る。一鬼は庭をつきあって居間から上がると、廊下の電話口に立った。

「お支度できました？」

「うん。みんな朱子がやってくれた」

「スリッパは？」

「入れてある」

「手に持つ小さい鞆に入れないと、——飛行機の中でも要りますわよ」

「そうしよう」

「鞆の鍵を忘れないように」

「大丈夫だ」

「わたくしね、そちらへ行く時間がないので、空港へ直接行くことにします」

「うん、無理に来なくてもいい」

「行きますわ。お姉さんにだけやらせて悪いから」

「仲よくやっているね」

一鬼は念を押した。

「ええ。少し吝^{けち}ちだけど」

「男はみな例外なく吝^{けち}ちなものだ」

「それでいて、時々変なことを威張るわ」

「男というものはみんなくだらんことを威張る」

それから、

「じゃ、電話を切るよ。——喧嘩はするな」

一鬼の方で受話器を置いた。まだ結婚して半年だから、しっくり行かないところもあるだろうが、そのうちにうまく行くだろうと思う。自分の旅行中だけは喧嘩されては困

る。

姉の朱子の方は至って夫婦仲もよく、むしろ必要以上にべたべたするところが気に入らぬくらいだが、妹の清子の方は朱子とは性格も違って生れつき冷静なところがある。

新婚生活に酔うといったタイプではない。それに相手も必ずしも一鬼の気に入っている青年とは言えなかった。別段欠点はないが、ほれ込んできめた相手とも言えない。母親がないので早く嫁がせてしまおうという一鬼の気持のあせりも幾らかはあったと思う。

朱子も清子も共に二十歳で結婚している。幾ら結婚年齢が若くなったとは言え、二人共まだ二、三年は独身生活を楽しんでいいはずだったが、一鬼は、親戚の者の言い方を借りれば、「さっさと二人の娘を片付けてしまった」のである。

何も娘を片付けてしまつて自分が低つとしたいわけではなかった。五年前に他界した妻の芳枝に対しても、残された娘だけはきちんと片付けてしまわなければならぬ責任があった。一鬼はそれを少し早目に果たただけのことであつた。

一鬼もまだ五十の半ばに達したばかりの若さだからと、とかく、色目で一鬼を見たがる向きもあったが、そうしたことはおよそ一鬼の気持からは遠かった。

世間の一部には、二人の娘を嫁がせてから一鬼が後妻でも迎えるのではないかという見方をする者もあった。まだ五十代で一生独身を押し通せるものもあるまいというのが、普通の考え方であった。親戚の者たちもそういう見方をしていたし、会社でも、また財界の友人たちの間でも、一鬼の話が出ると、そのような噂がささやかれていた。

しかし、こうしたことは一鬼の思いもよらぬことであつた。一鬼はこうしたことにはひどく割り切つた考えを持っていた。妻と名の付くものは一生に一人だけのものである。二人持つべきではない、そう思い込んでいた。子供のない場合や、子供の小さい場合は別であるが、子供が相当大きくなっている時は、不便ではあるが、まあ、子供のために独身を押し通してやつた方がいい。

こうしたことを、時には一鬼は口にすることがあつた。そうすると、大抵、そうむきになって考えない方がいいよという言葉にぶつかった。その相手の言葉には、いつこちらの考えが変らないわけでもないから、あらかじめその場のことを考えて、こちらを大きく抱きとっておこうといったわりの気持がこめられてあつた。

また相手によつては、何もそう細君に義理立てすることもあるまい、まだ若いんだから、亡くなった細君もその点は理解してくれるだろうと、そんな言い方をした。

いずれにしても、こうした言い方は一鬼の気持を知らない者の言葉であつた。一鬼は独身を押し通すということは細君への義理立てでもなければ、やせ我慢を押し通しているのでもなかった。大きな子供を残して細君に先き立たれた場合、夫が独身を押し通すことが、一番家庭内の煩わしいことを防ぐ方法だという固い確信を持っているからであつた。どうせ女の一人や二人はできるかも知れない。しかし、それを家庭の一員として迎えることは子供たちのためにも自分のためにもよくない。そうしたことから起る煩わしさは一切ごめんである。

こうしたところにも、一鬼の用心深い性格が現れていた。仕事の上でも石橋を叩いて渡るような渡り方をして来たが、家庭内の問題でも同じことだった。仕事でも、家庭のことでも、多少でも危惧の念があるなら、一鬼はそれから身を引いた。一鬼が一応事業家として名を成すことができたのも、今日の不況時代、曲りなりにも会社にいささかのひびも入れないでやっているのも、全く一鬼のこの性格のためであり、そうした安全第一の身の処し方のためであつた。

朝食を朱子と一緒にとっている時、会社から迎えの自動車 came。三十分程早い、三十分ほど早くやって来ないと、平生でも一鬼は氣にいらなかった。一鬼は濃いコーヒを飲み終ると、席を立て、二階の階段の方へ行つた。

「お二階へいらっしゃるの？」

朱子が訊ねた。

「玲子の顔を見て来よう」

一鬼は言つて、孫が眼を覺まさないように、そつと階段を上つて行つた。

「お父さん、おやめなさいよ。起きたら困るじゃありませんか」

朱子が階段の下で言つた。

「大丈夫」

「大丈夫じゃないわ。起きますよ、すぐ」

「吝ち吝ちするな、へるもんじゃない」

「起きたらわたし送りに行きませんよ。——起して羽田へ連れて行こうと思つて」

その声を背に、一鬼は玲子の寝ている突き当りの洋間へはいつて行つた。カーテンが降りているので、部屋は暗かつた。一鬼は玲子を可愛がつてはいるが、いくら可愛いといつても、相手は口もきけないし、歩けもしない嬰兒である。別れを惜しむほどの相手ではない。まして起して羽田まで送らせようなどという考えはさらさらない。

一鬼は朱子が羽田へ自分を送りに行つてゐる間玲子がひとりになるので、その間のことが気になるのである。嬰兒の世話をするのが好きな娘たちが二人いるが、何分若い

で安心してはまかせられない。泣き声が階下に聞えて来るまでは、二階の嬰兒を見まわることないだろう。

一鬼は玲子の小さい顔をのぞきこみ、半ば口をふさぐようにかぶさつてゐる掛けぶとんを下にずらした。少しぐらい体を動かしても窒息の心配がないようにしておかねばならぬ。自分の孫ではあるが、正確に言うならば預りものである。

一鬼は幼い生きもののかほそい呼吸音を聞いていた。孫が可愛いというより、息をしている幼い生きものを眼にしているのが好きである。小さいくせに、あらゆる可能性をその体内に詰めこんでいる。長い一生を生き永らえて行く限りないエネルギーも貯えている。ちよつとこれほど美しい生きものはあるまい。

一鬼は自分の血の幾らかを分ち持つてゐる孫だから、そのために可愛いとは思わない。小さい体に底知れぬ力を匿し持つてゐるところが美しく見えるのである。一日一日、ごく少し眼に見えるか見えぬほどずつ育つて行く。それがたまらなく美しい。自分の子供の朱子や清子を育てる時にこうした氣持を持たなかつたことが、今考えると不思議である。まだ自分も若かつたのび、美しいものをさして美しいとは感じなかつたのであろう。

一鬼は再び嬰兒の眠つてゐる部屋を出た。階下へ降りて

行くと、運転手の前島が鞍を自動車の方へ運ぼうとしていた。

「御苦労だな、朝早く」

そう礼を言ってから、

「だれか社から来るか」

と、一鬼はきいた。

「小杉さんと由紀さんがもうお見えになっています」

「どこに」

「外にお待ちになっています」

「ばかだな。家へはいればいいじゃないか」

一鬼は言ったが、そういう待ち方をしている方が、この家へはいって来るよりは、ずっと彼の氣持に合っていることははっきりしていた。

一鬼は居間のソファに腰を降ろした。お手伝いの貞江がお茶を入れて来た。茶を飲んでいる時ベルが鳴った。玄関へ出て行った貞江がすぐ大きなバラの花束を持って帰って来た。

「女の方がいらして、これを置いてまいりました」

花束には名刺がついていた。築地の料亭のお内儀かみづみの名が刷られてある。

「帰ったんだね」

「はい。あとで空港でお目にかかると言っております」

「じゃ、それを何かに挿しておいてくれ。枯らさないように」

一鬼は言った。出発を祝って花をくれたのであろうが、出掛けに厄介なことをするものだと思った。料亭のお内儀らしい気の使い方と言えは言えるが、こんなことは、まあ、余分のことに属すると言うべきであらう。

すると、またベルが鳴った。貞江は出て行ったが、すぐ戻って来て、

「R画廊の横溝さんがこれを差上げるように——」

「何だ」

一鬼は貞江の手から小さい紙包みを受けとった。開けてみると、お守り札がはいっていた。

「帰ったね」

「いいえ、お玄関にいらっしゃいます」

「朱子に出てもらってください。どこへ行った、朱子は」

「洗面所で顔を直していらっしゃいます」

「うむ」

一鬼は不機嫌な顔をして立ち上がった。お守りの贈り主が玄関に待っているのなら出て行かねばならなかった。せっかく最後にお茶をゆっくり飲もうと思ったが、なかなかそれができない。一鬼は玄関へ出て行くと、顔見知りの訪問者に、

「やあ、御苦労！ 有難う。いいものを頂戴した。持って行くよ。有難う、有難う」

相手をしゃべらさないで言った。

「きのう三島までお札をもらいに行つて参りました。——もっと早くお届けすればよかったんですが」

「そりゃ、忙しい中を。——や、どうも、や、や」

一鬼は頭を下げ、相手の体が扉の向うへ移動すると、すぐ居間へ戻った。

「茶を入れ直してくれ」

一鬼は洗面所からそこへ戻つて来ていた朱子に言った。

「きれいなお花をたくさん頂きましたね」

「いくらきれいでも外国へは持つて行けぬ。——茶をくれ」

一鬼は言った。朱子は茶を入れて来て、茶碗を卓の上に置くと、

「それお飲みになったら、すぐ出ましょう。悪いわ。小杉さんたち外で待つてゐるんですよ。それなのに、ゆうゆうとお茶など飲んで」

こういう邪慳な言い方をするところは亡くなった妻の若い時に似ている。

「小杉君たちにお茶は出したろうね」

「ええ、お出ししてあります。ここへお上がりになるよう

に言ったんですが、どうしてもくるまの方で——」
「まあ、いいだろう。出発間際に部屋に通つても落着くまい」

それから一鬼は朱子と、二人のお手伝いの娘たちに留守中の注意を与えた。

「戸締まりとガス、いいね。これだけはちゃんとしてもらいたい。あとは一も玲子、二も玲子」

今日から二、三日は清子夫婦が来て泊り、あとはずっと朱子夫婦が来ることになっている。いよいよ家を出ることになって、一鬼が玄関の土間へ降りようとした時、二階から玲子の泣き声が聞えて来た。

「泣いてるな」

一鬼が言うと、

「あら、起きたらしいわ。——頼みますわね。おむつ替えて、ミルク飲ませておいて頂戴」

朱子は貞江に言った。

「ちょっと見ておいで」

「そんなことしていたら遅くなるわ。貞江さん、頼みますね」

朱子は土間に降り立った。一鬼は靴を履きかけたが、思い直して、二階への階段を上つて行つた。

玲子は小さい寝台で火のつくように泣いていた。一鬼は

いったん嬰兒を抱き上げたが、結局は始末に困って、またもとの場所へ戻した。一鬼が玄關へ戻ると、

「何をしてらっしゃるのよ、出掛けに」

土間に立っている朱子が言った。

「君が産んだ子供が泣いてるんで見に行行ってやったんだ。泣かせるのはよくない」

それから、貞江に、

「送るのはいいから、二階へ行ってやってくれ」

一鬼は言った。

自動車は二台来ていた。一鬼と朱子が一台に、秘書課の連中が他の一台に乗った。くるまが走り出して塀に沿って曲ろうとした時、

「あら、ちょっと停めて下さい」

朱子が、ハンドバッグの中をのぞき込みながら言った。

「なんだ？」

「忘れ物」

「忘れ物は判ってる」

「財布と時計とハンケチを出して置いて、入れて来ませんでした」

くるまはすぐ後退し始めた。

「時さん」

朱子は窓から顔を出して、門の前にまだ立っている時代

の方へ声を掛けたが、思い直して、自分ぐるまから出て行った。二、三分で朱子は戻って来た。

「外出というと、君は忘れ物をするな。清子の方が落着いている」

「ほんとに。——赤ちゃんを産んだのでばけたのかしら」

「まだその年齢でもあるまい」

一鬼は笑いながら言った。

「戴いたお守り札は持つて行きませんか。テーブルの上にあったわ」

「なぜ持つてこない」

「だって持つて行かないと思ったんですもの」

「ちょっとくるまを停めてくれ」

こんどは一鬼が言った。

「あら、とりにいらっしゃるの？」

朱子は腕時計に眼を当てて、

「遅くなるわ。大丈夫かしら」

「じゃ、やめるか」

一鬼は言ったが、

「やはり取って来よう。せっかく三島の大社へ行ってもらって来てくれたものだ」

すぐくるまは向きを変えるために路地に頭を突込んだ。

「わたしのこと言うけど、お父さんだって忘れものするじ

やありませんか」

「ほけたかな」

「そうよ。気をつけないと」

くるまが門の前まで戻ると、朱子はお守り札を取りに行
くために、くるまから降りた。こんどはさつきより時間が
なかった。

「赤ちゃんの取り扱い、へただわ、あのひとたち」

そんなことを言いながら、朱子は戻って来た。

「泣いていたのか」

「ええ」

「それはいかんな。君、送らなくていいから、家に残って
なさい」

「でも、送って下さる方がありますのに」

「清子が来るからいい」

「だめ、あのひと御挨拶ぎらいだから。——運転手さん、
どうぞ」

その言葉で、くるまは走り出した。

「今日は仕方ないが、なるべく玲子を置いて出ないように
するんだな」

「ええ」

「玲子をおいて、よそへ食事になんか行かん方がいい」

「大丈夫よ」

「その大丈夫が当てにならん。大体、二人で出歩き過ぎる」

「そんなことないわ。土曜日だけよ」

それから朱子は、

「運転手さん、一時間で行けますかしら」

「行けると思います」

運転手は言った。

「一時間で行けたら、まだ四十分ありますわね」

朱子は言った。

「それにしても、いやに窮屈になったものだな」

「ゆうゆうとお茶を飲んだりしてらっしゃるから」

「お守り札で時間をロスしたな」

「そうよ。十分近く無駄にしました。この前も、その前の
時も、どなたかにお守り札いただきましたわね。あれ、持
ってらした？」

「いや、持って行かなかった。みんな神棚にあるだろう」

お守り札を持って行こうと思ったのは、こんどが初めて
である。いつも、旅さきで失くしてしまいそうな気がして、
かえって粗末にするよりはと思うって、神棚へ上げること
にしていた。それが、どういうものか、こんどだけは、それ
を身につけて行こうという気になったのである。何となく
弱気になっているものを、一鬼は自分に感じた。

一鬼はいつも羽田で飛行機に乗った瞬間、さあ、これで、